

立野遺跡

—近畿自動車道松原那智勝浦線
すさみ西インターチェンジ（仮称）事業に伴う発掘調査報告書—

2014年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

近畿自動車道紀勢線の建設に伴って平成22年度に実施された立野遺跡の調査では、弥生時代前期の自然流路が見つかりそこから多くの木製品や石器、土器が出土しました。特に木製品は全国的にみても第一級資料と言えるものです。

今回発掘調査を実施したのは、近畿自動車道すさみ西インターチェンジ（仮称）へのアクセス道路が設けられる範囲で、前回の調査範囲に隣接した場所です。

調査の結果、弥生時代前期から古墳時代にかけての自然流路、古代の溝や整然と打ち込まれた杭列等を検出しました。これにより、2300年以上も前からこの地で連綿と営まれてきた人々の生活の一端を辿り得ることができました。

ここに調査の成果をとりまとめ、発掘調査報告書を刊行いたします。本書が郷土の歴史の一頁を明らかにするための資料となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び本報告書の作成にあたりご指導、ご協力を頂きました関係者各位、地元の皆様方に深く感謝を申し上げますとともに、今後とも当文化財センターの活動に一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 工楽 善通

例 言

1. 本書は、近畿自動車道松原那智勝浦線すさみ西インターチェンジ（仮称）事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 本事業のうち、和歌山県の委託事業として和歌山県教育委員会による指導のもと、発掘調査平成24年11月26日から平成25年2月11日まで、出土遺物等整理業務平成25年10月1日から平成26年3月19日までの期間で、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査及び調査報告書刊行にかかる体制は下記のとおりである。

発掘調査	出土遺物等整理業務
事務局長（事務取扱管理課長）	事務局長（管理課長）
渋谷 高秀	勝浦 久和（平成25年12月25日まで）
埋蔵文化財課長	里森 修（平成25年12月26日～）
発掘調査担当者	埋蔵文化財課長 整理業務担当者 丹野 拓・寺西 朗平
寺西 朗平	井石 好裕

4. 本書の編集・執筆、遺構及び遺物の写真撮影は寺西が行った。
5. 本事業の遂行にあたり、和歌山県東牟婁振興局、地元自治会、地域住民の方々から多大な協力を頂いた。ここにあらためて感謝の意を表する。
6. 出土遺物は和歌山県教育委員会が保管し、発掘調査及び出土遺物等整理業務において作成した実測図やデジタルデータ、台帳及び写真などの記録資料は公益財団法人和歌山県文化財センターが保管している。

凡 例

1. 遺構等の土層について記載した土色及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修の『新版 標準土色帖』(2005年版)に基づいて記録した。
2. 発掘調査及び出土遺物整理作業は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』(2006.4)に準拠して行った。
3. 発掘調査において区画の設定等に用いた座標は、平面直角座標系（世界測地系・測地成果2011）第VI系による数値で、mを単位として表記した。また、図面には北方位として座標北を表示している。
4. 標高は東京湾平均海面（T.P.）による日本水準原点の数値を基準とした値である。
5. 本書に掲載した遺物図版の縮尺は、原則として土器及び石製品1/4、木製品1/8で表示した。
6. 遺構番号は基本的に発掘調査における遺構番号を踏襲しており、調査区ごとに1からの通し番号を検出順に付して表記した。
7. 本文中の遺物番号は、出土遺物観察表及び遺物写真図版の遺物番号と一致する。
8. 本書に掲載した地図は、和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(平成23年度版)及び都市計画図等に加筆したものである。

目 次

本文目次

序文、例言、凡例	
第Ⅰ章 環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第Ⅱ章 調査の経緯と経過	3
第1節 発掘調査	3
第2節 出土遺物等整理作業	4
第Ⅲ章 調査方法	4
第1節 記録作業	4
第2節 地区割り	5
第Ⅳ章 調査の成果	5
第1節 基本層序	5
第2節 遺構	6
第3節 出土遺物	7
第Ⅴ章 まとめ	14

挿図目次

図1 立野遺跡と周辺の遺跡	1	図5 調査区 1,2 遺構配置図・土層図	8
図2 調査区位置及び既往の調査範囲	3	図6 調査区 3,4,5,6 遺構配置図・土層図	9
図3 地区割り 大区画 小区画	6	図7 遺物実測図(土器)	11
図4 基本層序	7	図8 遺物実測図(石器・木製品)	12

表目次

表1 出土遺物観察表	13
------------	----

図版目次

図版1	図版4
1 調査地周辺(南から)	1 調査区6 遺構 604
2 調査区1第4層下面検出遺構(東から)	自然木出土状況及び土層(南から)
3 調査区3,4,5,6全景(東から)	2 調査区6 遺構 604(北から)
図版2	図版5
1 調査区1 セクション1 土層(南から)	出土遺物(土器)
2 調査区3 杭列検出状況(北から)	図版6
3 調査区3 遺構301検出状況(南から)	出土遺物(石器・木製品)
図版3	
1 調査区3 遺物出土状況(No.41木製品 東から)	
2 調査区3 遺物出土状況(No.42木製品 東から)	
3 調査区5 遺構501検出状況(南から)	

第Ⅰ章 環 境

第1節 地理的環境

和歌山県南部は沿岸部まで紀伊山地が迫り、太平洋に面して険しい岩礁と入り江の連なるリアス式海岸となっているが、この海岸線は西牟婁郡白浜町から東牟婁郡串本町までの延長 70kmに及ぶ範囲が景勝地として熊野枯木灘海岸県立自然公園に指定されている。和歌山県西牟婁郡に属するすさみ町は西にこの枯木灘を望み、町域の 90%以上を山間部が占める。産業として、イノシシと豚の交配種であるイノブタを観光資源として建国したミニ独立国やスキューバダイビングといったマリンスポーツ等の観光業があり、また周参見、見老津、江住といった入り江を拠点とする漁業も基幹産業のひとつとなっている。更に林産資源が豊富なことから、昭和 40 年代までは林業が伝統的に盛んであった。

すさみ町の東から西へと流れる周参見川は山間部を縫い、周参見湾に注ぐ。周参見湾はその湾の入り口に浮かぶ稲積島が外海からの波を遮り、古くから風待港或いは避難港として水運上の良港とされてきた。湾の周辺は周参見川の沖積作用により平野となっているが、立野遺跡はその周参見湾から北東へ 1.6kmほどの、平野東端にある。

現在周参見川は遺跡の北方 700m ほどのところを西流しているが、もとは立野遺跡のすぐ西側にある独立丘陵を迂回するように流れていたと考えられ、立野遺跡は旧周参見川の河岸とその堆積平野に立地するものと推定される。

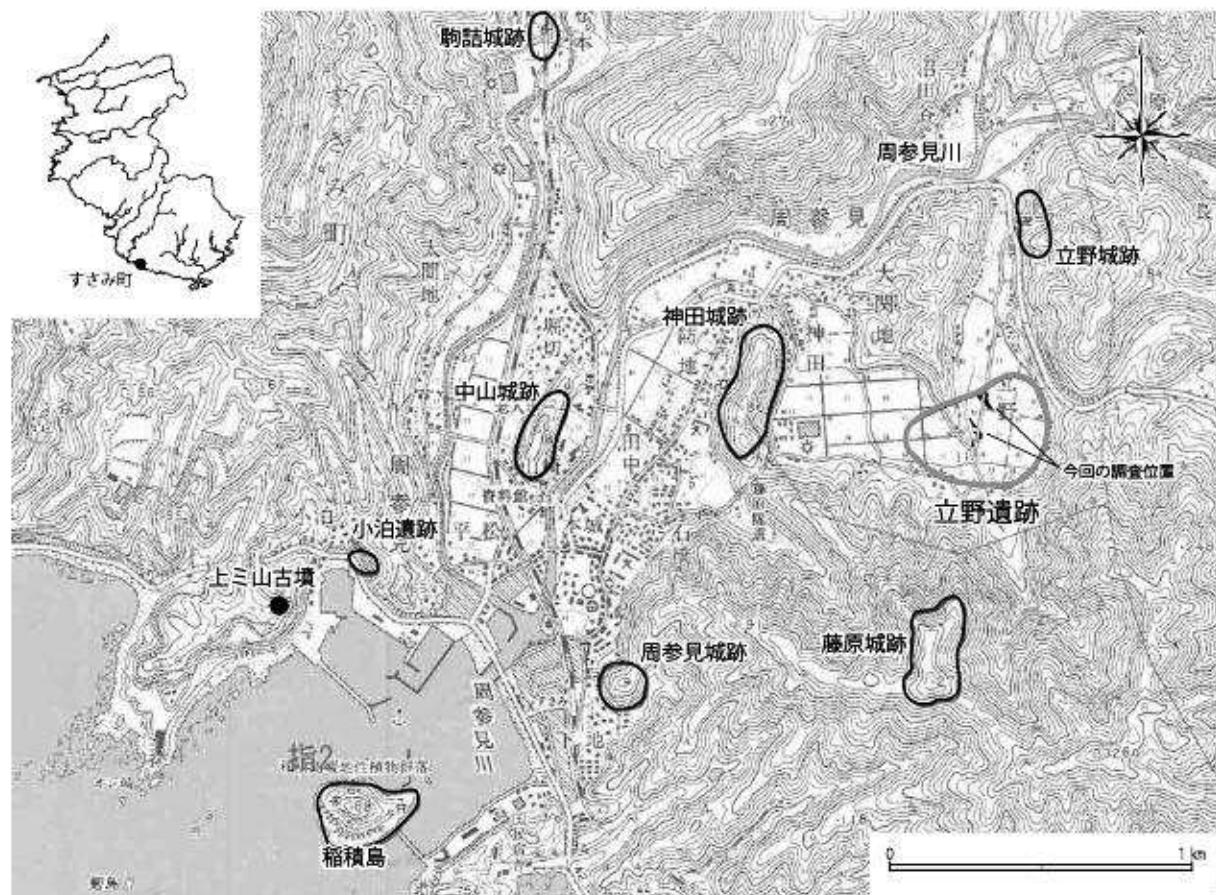


図 1 立野遺跡と周辺の遺跡

第2節 歴史的環境

すさみ町では、JR 周参見駅の東側で縄文土器片が採集され、また里野遺跡で石斧が出土したほかは縄文、弥生時代の遺跡についてこれまで詳らかとなっていたなかった。

立野遺跡は昭和 40～50 年代頃に水田内で深掘りをしていた際に、敲き石や須恵器等の遺物が発見されたことにより弥生時代から古墳時代の遺物散布地として周知されていたものの、前述したとおり発掘調査によって遺跡の詳細が明らかとなったのは平成 22 年度のことである。

この時の発掘調査（図 2）において弥生時代前期の自然流路から多数の遺物が出土したこと、この頃から既にこの地域で集落が形成され、水田耕作が始まっていたことが明らかとなった。また突堤文土器や石器と共に出土した鍬等の農具や工具、弓、容器、建築部材といった木製品やその未製品は、農耕社会成立期の木工を考える上で重要な資料となっている。

古墳時代の遺跡としては上ミ山古墳、立野遺跡、小泊遺跡がある。上ミ山古墳は周参見湾を見下ろす標高 81m の丘の頂に立地する直径 40m、高さ 4m の円墳で、出土遺物等から 6 世紀後半頃の築造であると考えられている。箱式石棺 1 基及び横穴式石室 2 基が内部主体として確認されていたが、現在は墳頂部の横穴式石室のみが残る。この横穴式石室は副室を持ち、玄室のプランは正方形に近いもので、石障を用いて 3 区の屍床を設けた形態からは中・北九州地方との関連を窺わせる。昭和 45 年の発見時には既に羨道が破壊されていたが、このとき実施された発掘調査では未盗掘の玄室から須恵器のほか直刀、矛、刀子等の鉄製品、管玉、ガラス製小玉、琥珀製丸玉、埋木製棗玉等の遺物が出土している。この古墳の東方 300m 程に所在する小泊遺跡では須恵器のほか製塩土器が出土しており、沿岸部における塩の生産を想定することができる。

すさみ町は古代律令制下において牟婁群に属したものとみられるが、古代の遺跡はこれまで明らかとなっていない。

戦国時代になると、一帯を掌握した周参見氏により多くの城郭が築かれることになる。湾を見下ろす標高 70m の山上に周参見城があり、さらに北方の平野部中央に中山城、神田城がある。神田城は標高 80m 程の丘陵上にあり、現在も本丸をはじめ二の丸や出丸等曲輪跡のほか、石垣の一部が残る。

平野部縁辺の交通路上には駒詰城、立野城がある。立野城は現在遺構として顯著に残るものはないが、ここから古座川町方面へ街道が延びている。

藤原城は平野を北に見下ろす山上にあり、すさみ町内では最高所の城郭となる。

紀伊山地に点在する山岳霊場や参詣道は現在、「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコによる世界遺産の登録を受けているが、すさみ町域では仏坂を下って現在の JR 周参見付近を経由し、長井坂を登る大辺路があり、また古座へと向かう古座街道の分岐点もあったことから古く交通の要衝とされ近世には紀州藩の口熊野代官所が置かれていた。

近代、すさみ町立野では昭和の初め頃から 30 年代にかけて 3 度の土地改良工事が行われた。昭和 12 年起工の排水工事では土管を埋設したほか、粗朶を詰めた暗渠を整備している。また昭和 27 年から 31 年にかけて行われた排水工事はより大規模に暗渠等の排水路が整備されており、さらに昭和 33 年から 38 年にかけて耕地区画の整理がなされている。

第Ⅱ章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査

近畿自動車道紀勢線事業に伴うすさみ西インターチェンジ（仮称）の建設により、埋蔵文化財包蔵地として指定された立野遺跡の範囲内にインターチェンジへのアクセス道路が建設されることになった。当該開発範囲は平成22年度に実施された発掘調査の調査範囲に隣接するもので、県文化遺産課と県東牟婁振興局とで協議がなされた結果、アクセス道路の建設予定範囲を対象として本調査を実施する運びとなった。

今回の調査ではその範囲が道路や水路に分断されていること、さらに排土を仮置きするための場所を確保するといった要請から、6区画の調査区を設定した。

現地における調査に併行して基準点測量を行い、調査区内及びその周辺に遺構図作成等に使用するための3級、4級基準点を設置した。

ラジコンヘリによる航空写真撮影及び航空測量は平成25年1月19日に実施した。

調査期間は平成24年11月6日から平成25年3月15日まで、このうち現地における発掘調査は平成24年12月から平成25年2月にかけて実施した。調査面積は1249m²である。

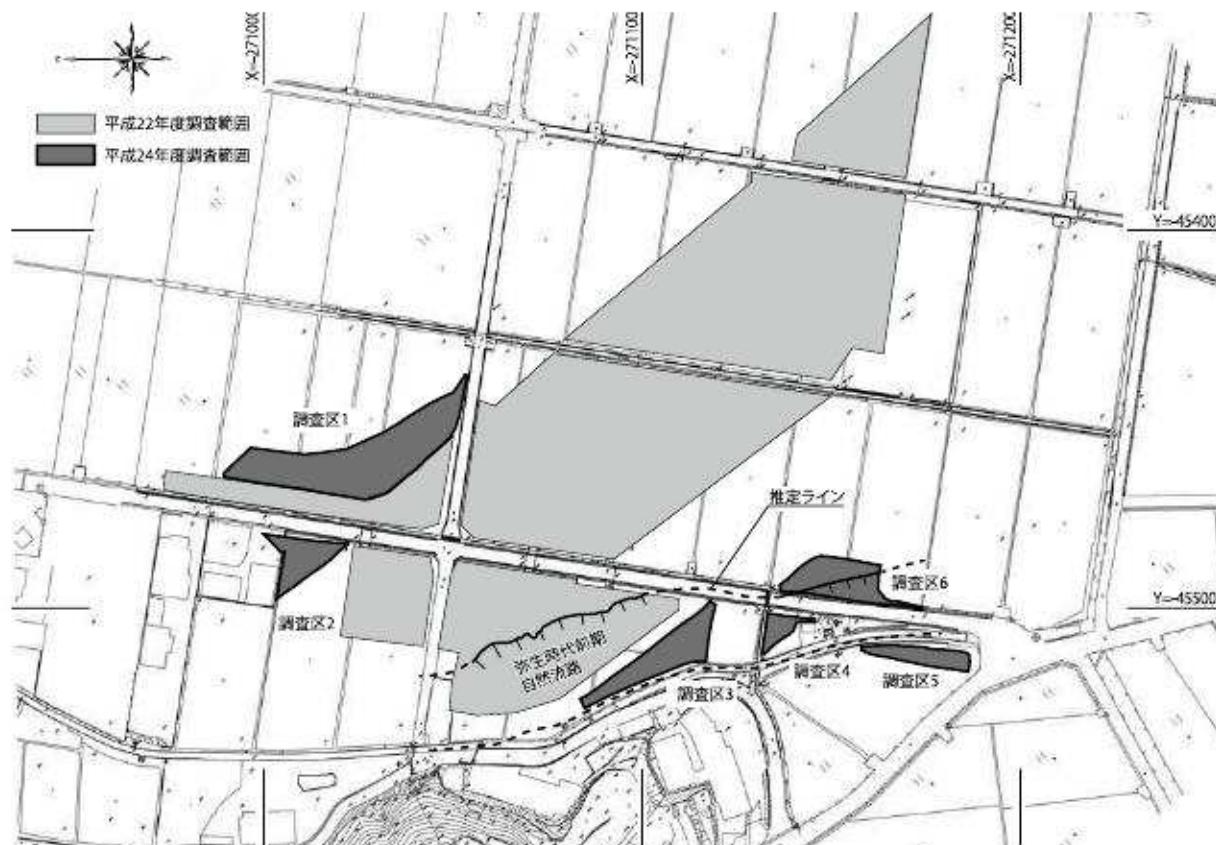


図2 調査区位置及び既往の調査範囲 (1:2000)

第2節 出土遺物等整理作業

1. 応急整理

土器等の出土遺物は遺構の性格や時期等を判断し調査方法を検討するための資料となるため、発掘調査と併行して監督員詰所において水洗及び注記作業を行い、さらに登録作業を並行して実施した。

登録作業は土器・石器類と木製品類等の二種類に分け、調査区毎に1から通し番号を与えた。その際、木製品類に対しては“W”を冠した。また土器類の全点には調査コードを併せて注記した。全ての遺物の水洗、注記、登録作業は現地での調査期間中に完了している。

2. 出土遺物等整理業務

発掘調査報告書作成に伴う出土遺物等整理業務は、土器類コンテナ5箱、木製品16点、石器類11点を対象に、これらの出土遺物について接合及び補強、復原、実測、写真撮影等一連の作業を行うとともに報告書の作成を行った。また、出土遺物の実測図を作成してトレース作業を行い、これをレイアウトして報告書の図面原稿を作成した。さらに出土遺物について報告書に掲載するための写真撮影を行い、現地で調査中に撮影した遺構写真等とともに写真図版を作成した。

3. 出土遺物保存処理

木製品3点について、(株)吉田生物研究所に委託して高級アルコール含浸法により保存処理を実施した。保存処理をしなかったものについては、パキュームシーラーにより真空状態にした専用のフィルムパック内に保存している。



写真1 出土遺物応急整理作業（遺物水洗）



写真2 出土遺物等整理作業（実測図作成）

第III章 調査方法

第1節 記録作業

1. 基準点・水準点測量

基準点は平面直角座標系・世界測地系（測地成果2011）第VI系による3級基準点と4級基準点を設置した。これらの基準点は2級基準点「2-29」、[2-30]を既知点としてGPS測量を行い新設した。以上の測量作業は、専門業者である株式会社南紀航測センターに委託して行った。

2. 実測・写真撮影

検出した遺構や遺物の出土状況、調査区内及び遺構内の堆積状況については平面実測図、土層実測図等を作成し、写真撮影を行っている。

平面実測図は調査区1から6について航空写真測量を行い縮尺50分の1及び100分の1で図化した。さらに検出した遺構に対し個別の平面図を作成する場合等、縮尺の大きい図を作成する必要があるときは、調査担当者が測量、図化した。遺構配置図（S=1/100）、調査区壁面土層図（S=1/20）、各遺構の平面図（S=1/10,1/20）、土層図（S=1/10,1/20）、断面図（S=1/10,1/20）、

遺物出土状況図（S=1/10,1/20）等がこれにあたり、A2 サイズの方眼紙に作図した。

写真は 4×5 判及び 6×7 判のモノクロ、カラーリバーサルフィルム、35mm モノクロ、カラーリバーサルフィルムのほか、補助的に 1420 万画素相当のデジタルカメラを使用して調査担当者が撮影した。デジタルカメラの撮影画像は RAW 形式及び JPEG 形式で保存している。撮影用足場は調査区の全景写真撮影時、若しくは個別遺構撮影時で必要な時に設置した。

3. 航空写真撮影

航空写真撮影は株式会社南紀航測センターに委託し、ラジコンヘリを用い調査区 1 から 6 の全てについて 1 回の撮影を行った。この撮影では、全調査区及び周辺を含めた斜め方向からの写真、全調査区の垂直写真、調査区毎の垂直写真を撮影している。成果品として、デジタルモザイクによるパネル写真、カラーリバーサルフィルム (6×6 判)、密着写真等が納品されている。

第2節 地区割り

実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割りは平面直角座標系により、前回調査時の地区割りに準じて設定した。

まず原点(X=-270000,Y=-45000)から X 軸に沿って西方向へ、Y 軸に沿って南方向へそれぞれ 1kmごとに区分し、1km四方の範囲を 1 単位とした区画を設定した。

この区画内を同様の方法で 100m ごとに区分し、X 軸方向に A ~ J のアルファベット（大文字）を、Y 軸方向には 1 ~ 10 のアラビア数字を付して、区画名を「A6」等とする 100m 四方の範囲を 1 単位とした大区画を設定した。

大区画内にはさらに 4m 四方の範囲を 1 単位とする小区画を設定し、北東隅から X 軸方向にアルファベット（小文字）a ~ y を、Y 軸方向にアラビア数字 1 ~ 25 を付して区画名を「a12」等と呼称している。実測図の作成には座標のほかに、以上のとおり設定した区画によって位置を特定した。また遺物の出土位置についても同様で、これらについては「A6a12」等、大区画一小区画の組み合わせにより表記している。

第IV章 調査の成果

第1節 基本層序

調査地の基本的な土層は第 1 層から第 13 層に区分した。

第 1、2 層は現代の耕作土または表土である。第 3 層は黒褐色（10YR3/1）を基調とする層で、調査ではこの第 3 層までを機械掘削対象とした。

第 4 層は灰黄色を基調とするシルトで、弥生時代から古代にかけての遺物を包含する。

第 5,6 層は調査区 1 北半で確認された古代の遺物包含層である。これに対応する土層は調査区 3,5 においても確認しているが、溝の埋土であり、木屑（木質遺骸等の有機物）を多量に含む。因って包括的に第 5 及び 6 層としたが、更に分層が可能である。第 7 層は古墳時代の遺物包含層、第 8 層は弥生時代中期の遺物包含層、第 9 層は弥生時代前期の流路埋土であり、第 10 層は明青灰色シルト・微砂で弥生時代前期の遺構面且つ地山である。第 11 層（明青灰色細砂・微砂）、第 12 層（礫・粗砂）、第 13 層（明青灰色シルト・粗砂・礫）はいずれも地山と判断されるが、これらの土質の違いは堆積条件によるものとみられる。

遺構検出は第 4 層下面を遺構面（第 1 遺構面）として行ったが、調査区 1 の北半については

第4層以下に第5,6層の堆積を確認したことから、第6層下面を第2遺構面として実施した。

第2節 遺構

1. 調査区1(図5 図版1,2)

基本的に第4層下で地山となるが、全体的に西側から東側へ向けて緩やかに傾斜しており、調査区北半部分では第5,6層の堆積がある。

遺構101 幅30cm程度の溝状遺構である。調査区中央付近で東西方向から南北方向へと方向を変える。古墳時代から古代の土師器、須恵器が出土した。

遺構102 自然流路または湿地の痕跡とみられる。弥生時代及び古墳時代の遺物が出土しており、埋土下位に木片が混入する。雨水等が標高の高い西側から低地の平野中央へと長期間にわたり水が流れ込んでいた状況が窺える。

遺構103 古代以降の水田に伴うと考えられる畦畔である。畦畔中から山茶碗(図7、図版5-6)が出土した。

遺構105 落ち込み状の遺構で、古墳時代から古代にかけての遺物を含む。遺構103(畦畔)の存在から、水田の痕跡であると考えられる。

遺構107,108,109,110,111,112 第10層上面で検出した南北に延びる幅30cm程度の浅い溝状の遺構である。底部付近は粗砂及び細礫の堆積があり、ここから弥生時代中期の土器片が出土している。

調査区2(図5)

町道の西側に設定した。現在の水田耕作土及び床土である表土は弥生時代から近世の遺物が混入し、その下層は河原石を主とする地山である。

調査区3(図6 図版2,3)

弥生時代前期・中期、古墳時代、古代の各時期における自然流路及び溝を検出した。これらのうち、上端を検出したのは遺構301のみである。それ以前の時期の自然流路はいずれも埋土の堆積が調査区のほぼ全体にわたっていたことから、層ごとに掘削し遺物を取り上げた。

遺構301 古代の溝状遺構である。埋土は一様に木屑(木質遺骸を主とする有機物)を多量に含み、下位は粗砂、細礫を少量含む。杭の他、田下駄とみられる木製品等が出土している。

遺構302 20~40cm程度の間隔を空け2列に打ち込まれた杭列である。第6層上面で検出した。

遺構303 第6層下面に検出した古墳時代の流路と考えられる遺構で上端及び下端の可能性がある段差を5~6m程度確認したが、埋土はその上端を覆い調査区のほぼ全体に薄く堆積していた。須恵器(図7 図版5-7,8)等が出土している。

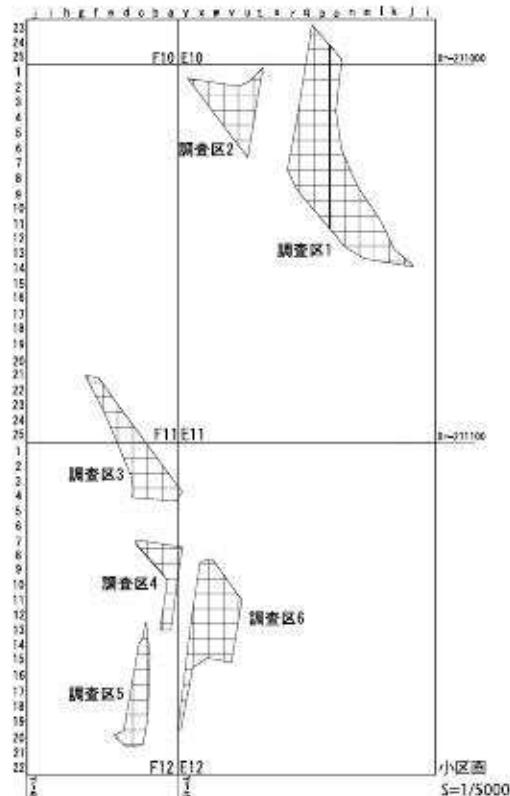
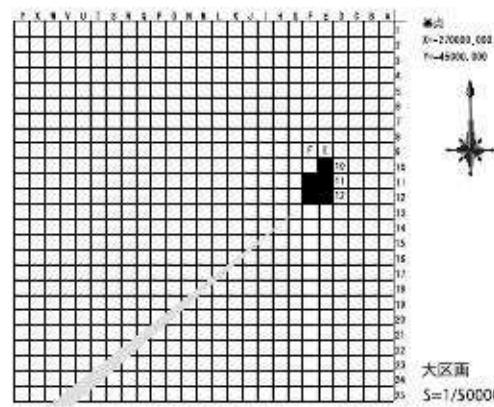


図3 地区割り 大区画・小区画

遺構 304 弥生時代中期の自然流路である。埋土は灰黄褐色を呈する木屑層であるが、上面はやや黒く変色していた。また上層がシルトを主体としたものであったため、それにパックされた状態となっていた。流路の上端、河床中央を検出していなかったため方向や幅は不明である。

調査区 4 (図 6)

調査区西端で遺構 301 に続くとみられる溝の一部を検出したほか、この遺構検出面より下層では全面にわたって弥生時代中期・後期に帰属する自然流路の堆積を確認した。

遺構 401 古代の溝状遺構で調査区 3 の遺構 301 と同一の遺構である可能性が高い。

遺構 402 自然流路であり、埋土の殆どが木屑等である。弥生時代中期から後期にかけての土器及び建築部材とみられる木製品が出土した。流路の底は地山で径 3 ~ 8cm 程度の丸い礫及び細礫の堆積であり、調査区の東側ほど粒径の小さいものが多くなる。また調査区全体において東へ緩やかに下降していることから、河床は更に東へ拡がるものと推定される。

調査区 5 (図 6 図版 3)

遺構 501 遺構 502, 503, 504 同様、第 5 層下面で検出された古墳時代後期の溝状遺構である。埋土には長さ 1m 程度の比較的大きな木片が含まれており、須恵器等が出土している。

調査区 6 (図 6 図版 4)

遺構 603 弥生時代中期の自然流路とみられ、第 8 層を埋土とする。調査区のほぼ全体を占め、遺構 604 の埋土を浸食して流路を形成している。

遺構 604 弥生時代前期とみられる自然流路であり、第 11 層上面に検出された。突帯文土器とみられる土器片や頁岩製の石器等が出土している。前回の調査において確認された自然流路の下流にあたり、独立丘陵の東側裾部に沿って蛇行すると推定される(図 2)。埋土は木屑(木質遺骸を主とする有機物)を多量に含むが、最下層は堅果類や小枝を僅かに含む薄い砂層である。

第3節 出土遺物

土器

調査区 1 1~3 は弥生土器。1 は甕の底部、2 は高环の脚部である。時期は弥生時代後期とみられる。4, 5 は須恵器。环蓋及び环身である。6 は山茶碗で、遺構 103(畦畔) 中より出土した。

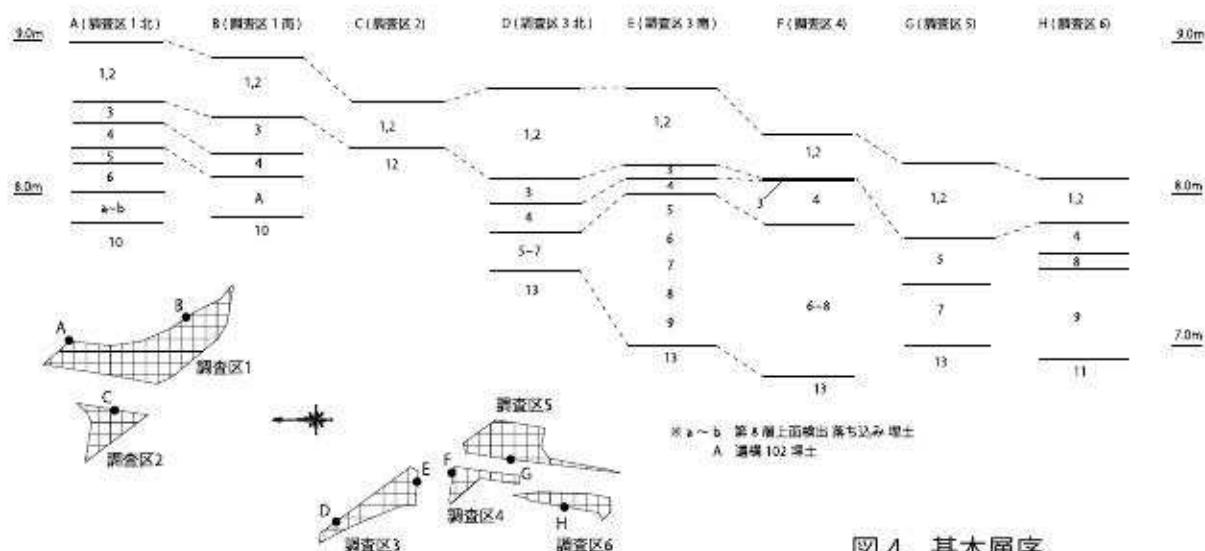


図 4 基本層序

無釉であるが、見込みと高台の外面及び内面にはわずかに自然釉の付着があり、底部は糸切り痕が残る。11世紀後半から12世紀前半頃に帰属するものと考えられる。

調査区3 7,8,10は須恵器である。7は広口壺の上半部で、頸部上位に櫛描波状紋、肩部にカキ目を施す。8は横瓶の上半部である。内面には同心円の当て具痕がみられ、外部は格子目タタキの後、頸部から同部にかけて縦方向のカキ目を施す。遺構303から出土した。出土部位により、実測図は側面方向から作図した。10は瓶の下半部である。胴部下半から底部をヘラ削りし高台を作る。9は土師器である。11は須恵器壺、12は土師器壺、13は土師器皿である。

14は灰釉陶器皿で高台内に「×」のヘラ描きがある。無釉であるが、見込みにはわずかに自然釉の付着がみられる。高台下端部はやや尖って丸みを帯びる。15、16は黒色土器である。15はA類（内黒）で内外面ともにヘラミガキを施す。内側は口縁端部が段をなし、さらにその下部に沈線を1条巡らす。16はB類（両黒）で、内外面ともに緻密なヘラミガキを施すが、暗文の加飾はない。口縁端部は段をなし、高台は端部がやや丸みを帯びて断面がハの字状に開く。時

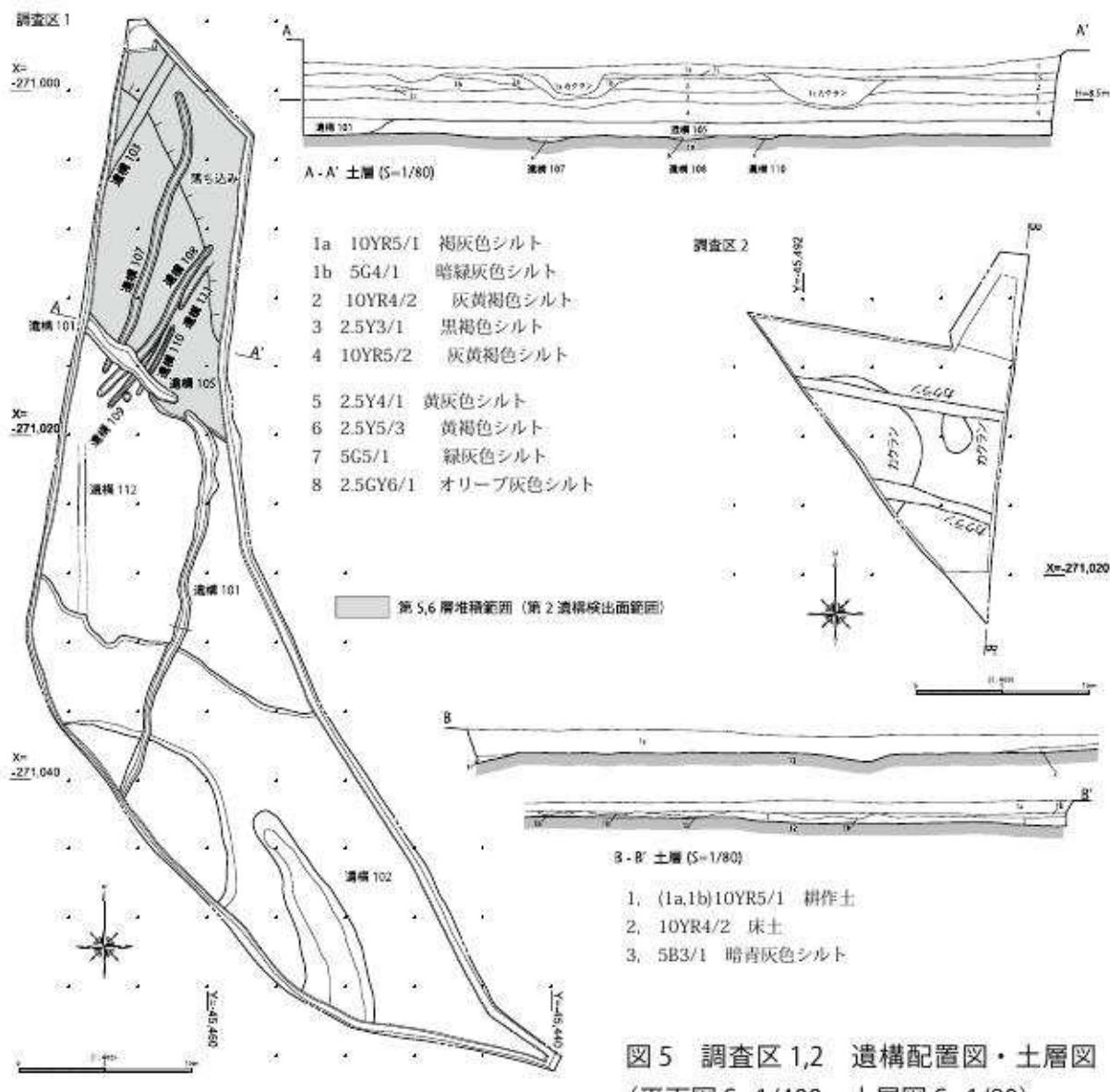


図5 調査区1,2 遺構配置図・土層図
(平面図 S=1/400 土層図 S=1/80)

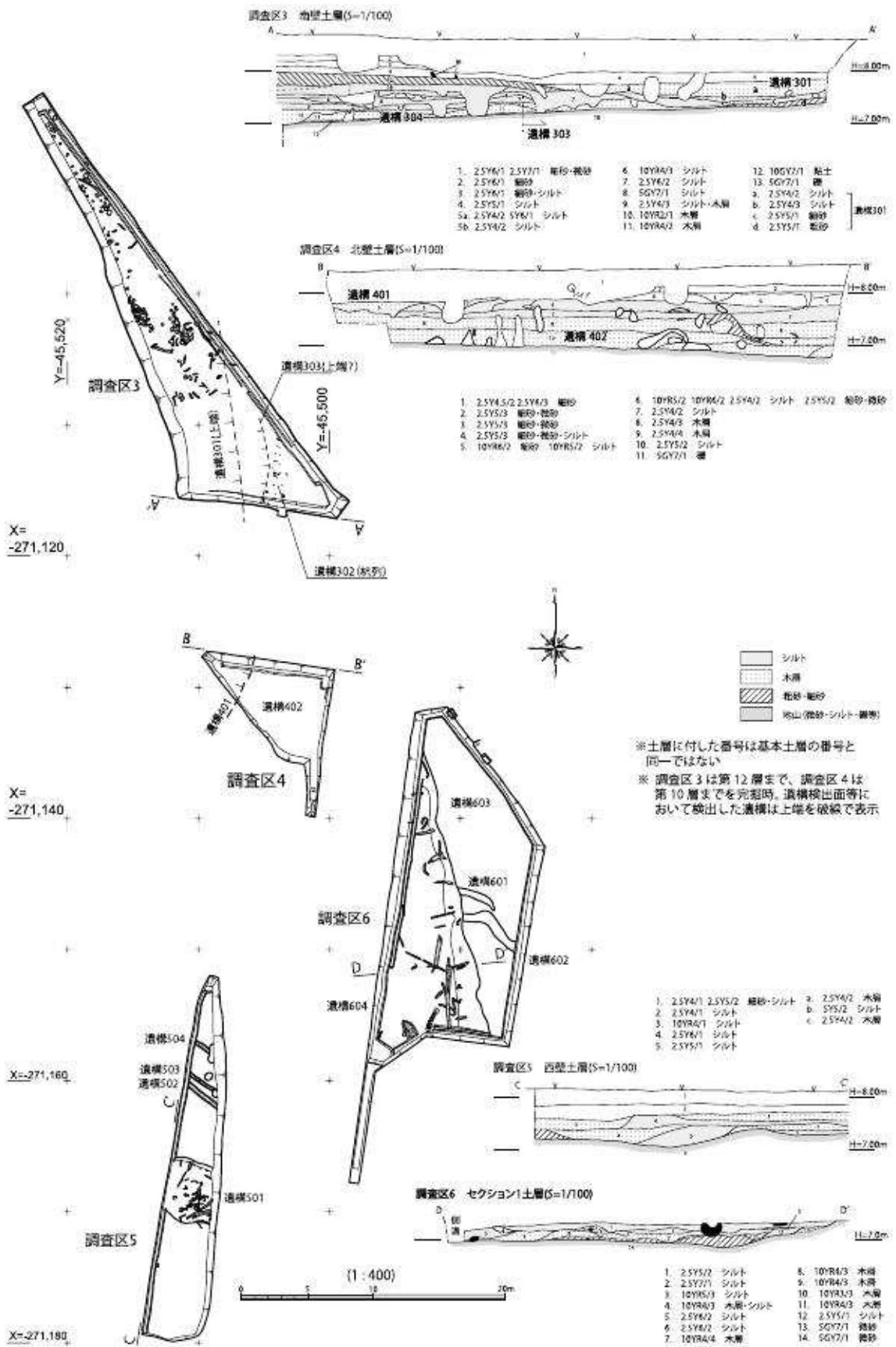


図6 調査区3,4,5,6 遺構配置図・土層図

期は10世紀から11世紀頃に帰属する。17は製塙土器で、口縁を含む上半部分の一部のみ出土した。時期は7～8世紀に帰属する。

調査区4 18は直口壺で、端部を僅かに肥厚させた口縁端部に4条の凹線を巡らせる。19、20は壺または甕の底部である。21から23は高坏の脚部で、時期は弥生時代後期に帰属する。

調査区5 24は弥生土器で、壺の口縁部である。口縁部が頸部からやや直立気味に立ち上がる。器表面はやや摩滅しており、調整は内外面とも明瞭でないが外面は縦方向のハケ調整を施す。第5層に混入して出土した。時期は弥生時代中期に帰属する。25は須恵器蓋である。

調査区6 26は高坏脚部で、摩滅しており調整は不明である。遺構603埋土中より出土した。

石器（図8・図版6）

27から31はいずれも頁岩製である。27は調査区1遺構102から出土した。3辺を階段状に剥離し、うち1辺に摩滅が認められる。28は調査区3の弥生時代中期の自然流路埋土から、29は4区の最下層から出土した。30は調査区5の第3層から出土したもので、4辺のうち3辺を刃部状に加工し、他の1辺には摩滅が認められる。31は調査区6の遺構601から出土したもので、長方形を呈するが1辺は欠損時の破断面とみられ、石斧の一部分であると考えられる。32、34は敲石である。石材は砂岩とみられやや扁平な楕円体を呈する。32は平面及び側面に敲打による微細な凹みが集中するが、34はそれが平面にのみ認められる。33は敲石であるが扁平なもので、台石としての使用も考えられる。これも石材は堆積岩とみられるが粒度の大きい長石、石英を含む。35は鑿状石斧である。石材は頁岩で、側面及び刃部の両面を研磨しており、特に片側からの研ぎ出しが著しい。36は打製石斧の一部と考えられ、刃部を含む大部分を欠損している。37は砥石である。遺構301検出面から出土した。やや弧状を描く直方体で、小口面を除いた4面のうち3面を砥面としている。石材は極めて粒度の小さい砂岩である。

木製品（図8・図版6）

38、39は杭の先端付近である。38は最大径が6.6cmで、遺構302（杭列）に用いられていたものである。樹皮を取り除いた白木を加工している。39は最大径が3.6cmで、遺構301の埋土中より出土した。40は板状をした木製品の断片で、長さは24.3cm、幅3.5cm、厚さ0.7cmである。欠損していない片側の端部は摩滅している。

41は田下駄の足板と考えられる。遺構301から出土した（図版3写真1）。全長25.8cmで長辺の片側を欠いているが、両端に切り込みを入れ、3カ所を穿孔する。緒孔とみられるこれらの穿孔は平面が円形で、断面は内湾する曲線を描く。端部の片方に部材（枠木か）の痕跡とみられる帯状の凹みがあることから、枠型田下駄または輪カンジキ型田下駄の足板であろう。

42も田下駄の足板とみられるもので遺構301から出土した。2片に分断され2カ所の緒孔を欠くが、組み合わせていた部材の痕跡とみられる帯状の凹みが片方の端部にある。全長は18.1cmと29.2cmで、出土状況（図版3写真2）から復原すると全長は47cm以上と推定される。同様の形状をした遺物として静岡市上土遺跡出土の枠型田下駄足板があり、枠型田下駄または輪カンジキ型田下駄の左足用足板である可能性が高い。

43（縮尺1/16）は建築部材と考えられる。全長は171cmで、一方の端部は欠損しているが、もう片方は加工して尖らせている。また一カ所に切り込み（図版6）が施され、ここで他の部材と相い欠き接ぎ状に組み合わされていたものと推定される。

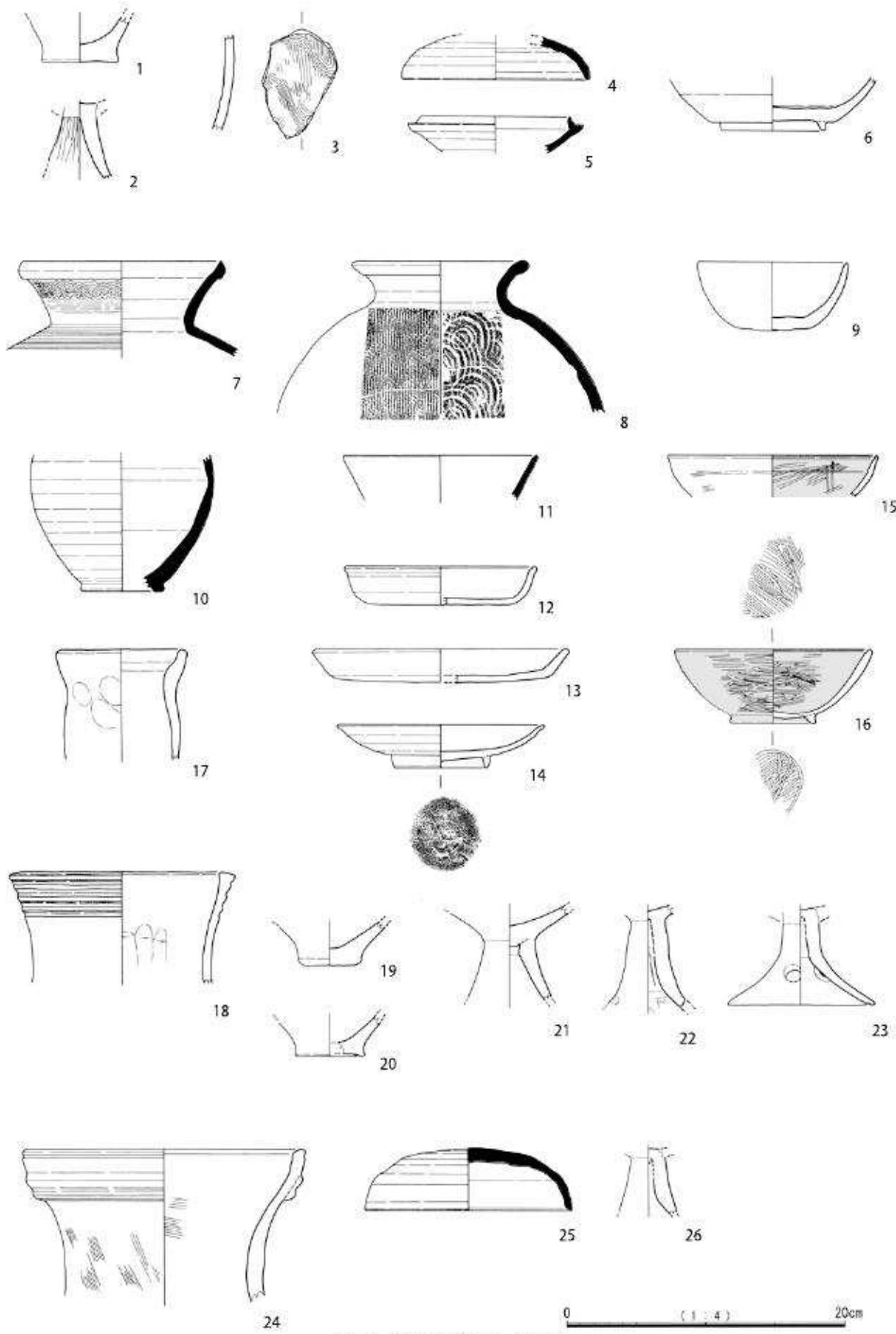


図7 遺物実測図（土器）

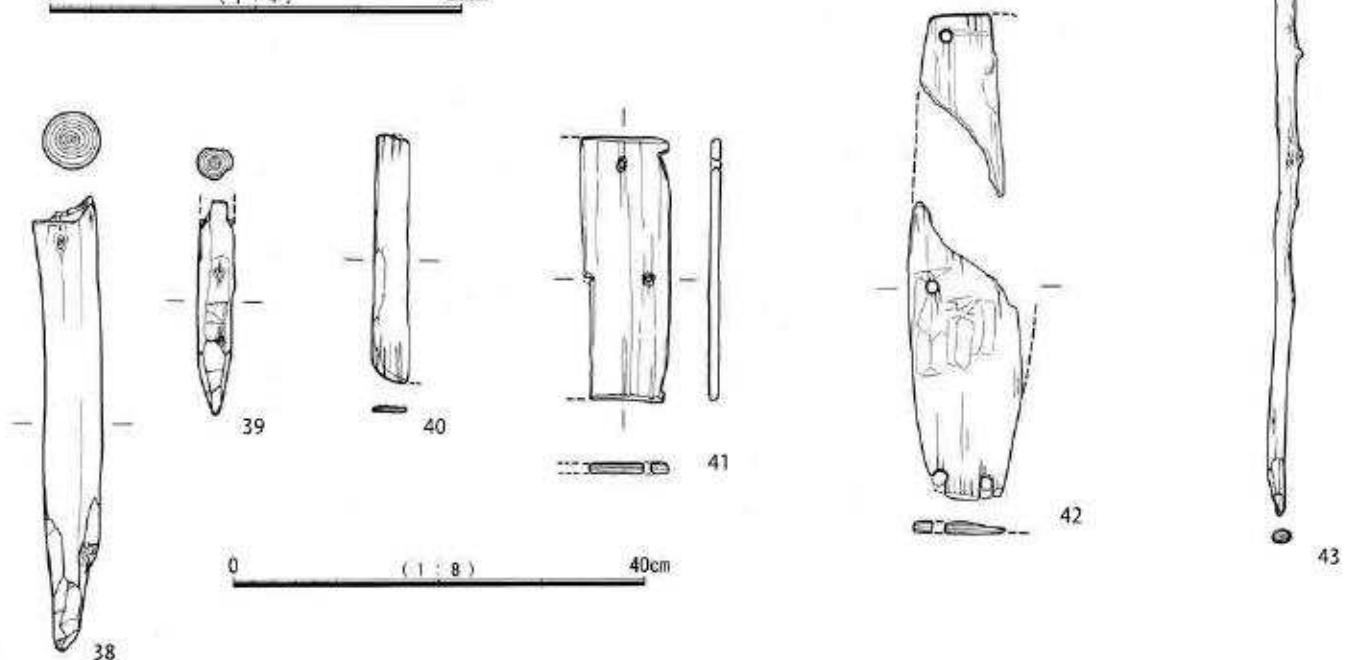
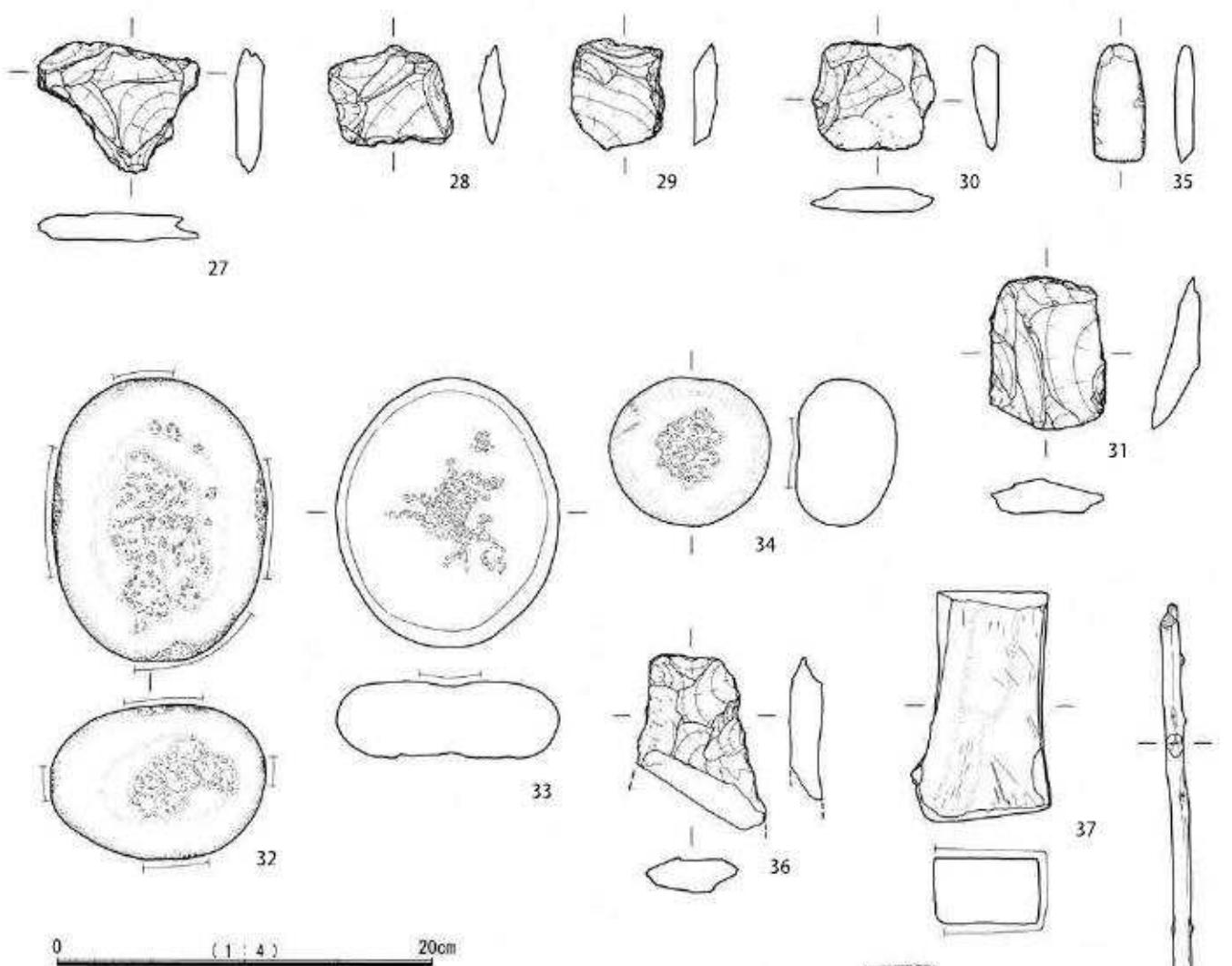


図8 遺物実測図（石器・木製品）

出土遺物観察表

土器

番号	登録番号	種類 器種	調査区	遺構 層位	口径 cm	底径 cm	残存率	色調	形態・技法	備考
1	1-22	弥生土器 甕	1	包含層 第4層	—	(5.4)	底部25%	外 10YR8/2 灰白～10YR7/3に似い 黄橙 内 N3/ 韶灰	外面は摩耗のため調整不明	反転復原 勝土普通 φ 1mm以下の砂粒を僅かに含む
2	1-1	弥生土器 高环	1	102	不明	不明	全体不明	外 2.5Y8/2 灰白 内 7.5Y8/6 浅黄橙	外表面ヘラミガキ	勝土やや密 焼成良
3	1-25	弥生土器	1	包含層 第4層	不明	不明	5%以下	外 5YR7/6 橙 内 N5/～N4/ 灰	外面ハケ日調整後、燐攝或状文	勝土普通 焼成良
4	1-22	須恵器 壺	1	包含層 第4層	(13.4)	—	口縁 20%	外 NT7/ 灰白～N6/ 灰 内 NT7/ 灰白～N6/ 灰	—	反転復原 勝土緻密
5	1-22	須恵器 壺身	1	包含層 第4層	(10.8)	—	10%	外 NT7/ 灰白～N6/ 灰 内 NT7/ 灰白～N6/ 灰	外外面回転ナデ	反転復原 勝土緻密 φ 1-3mmの長 石粒 φ 0.1-0.5mmの黒色粒含む
6	1-32	山茶楓 瓶	1	103	—	7.6	底部 100%	外 NB7/ 灰白～2.5GY5/1 オリーブ灰 内 NB7/ 灰白～2.5GY5/1 オリーブ灰	底面回転条切り 貼り付高台	反転復原 勝土緻密 φ 0.1-0.5mm の黒色粒確かに含む
7	3-51	須恵器 壺	3	301	(14.2)	—	口縁 25%	外 NB7/ 灰白～N6/ 灰 内 NB7/ 灰白～NT7/ 灰	頸部に燐攝或状文 肩部上位に燐攝文	反転復原 勝土緻密 焼成良 口縁内外面に自然触合着
8	3-19	須恵器 壺	3	303	(12.8)	—	口縁 40%	外 NB7/ 灰白～N6/ 灰 内 N5/ 灰	肩部はタクタク後力を日調整 肩 部以下内面は同心円文で具徴	反転復原 勝土緻密 焼成良 φ 1-2mmの白色粒多量に含む
9	3-8	土師器 瓶	3	301	(10.7)	(5.8)	25%	外 2.5Y6/2 灰黄 内 7.5YR6/4 に似い橙	外外面ナデ 底部未調整	反転復原 勝土やや粗 焼成良
10	3-17 19.28	須恵器 壺	3	301	—	(6.1)	全体不明 高台 35%	外 N4/ 灰 内 N5/ 灰	外外面回転ナデ ヘラ削りによ り高台削り出し	反転復原 勝土緻密 焼成良好
11	3-18	須恵器 壺	3	301	(14.0)	不明	口縁 15%	外 N5/ 灰～N4/ 灰 内 2.5Y7/1 灰白	外外面回転ナデ 非常に薄い作 り	反転復原 勝土密 焼成良好
12	3-21	土師器 壺	3	301	(13.6)	(11.2)	全体 25% 口縁 15%	外 10YR5/4 に似い黄橙 内 10YR6/4 に似い黄橙	外外面をナデ 体部を横ナデ 口縁端に沈線	反転復原 勝土普通 焼成良 底面に×のヘラ引きあり
13	3-8	土師器 瓶	3	301	(18.0)	(15.5)	25%	外 10YR6/2 灰黄～2.5Y6/2 灰黄 内 10YR4/2 灰黄	外外面をナデ 体部を横ナデ	反転復原 勝土やや歎 焼成良
14	3-1	灰釉陶器 皿	3	301	(14.8)	(6.6)	口縁 25% 高台 75%	外 NB7/ 灰白 内 NB7/ 灰白	無釉 高台は貼り付けで端部丸 くやや内溝する	反転復原 勝土緻密 焼成良好 底面外側にヘラ描き有
15	3-52	黑色土器 碗	3	301	(15.0)	—	口縁 15%	外 2.5YR5/2 暗灰黄 内 N3/ 駿灰	内黒 外外面ヘラミガキ 内面 に2条の沈線	反転復原 勝土普通 焼成良
16	3-10	黑色土器 碗	3	301	(14.0)	(6.2)	口縁 10% 高台 40%	外 N3/ 駿灰 内 N3/ 暗灰	内黒 外外面ヘラミガキ 口 縁端部内面に沈線	反転復原 勝土密 焼成良
17	4-10	製塙土器	4	6	(8.6)	不明	20%	外 10YR7/3 に似い黄橙 内 10YR8/3 浅黄	外外面ナデ 頂部付近ヒビオサ 工	反転復原 勝土や歎 φ 2-5mmの 砂粒を多量に含む。
18	4-10	弥生土器 直口壺	4	最下層	(14.1)	—	口縁 25%	外 10YR7/4 に似い黄橙 内 2.5YR5/1 浅黄～ 10YR7/3 に似い黄橙	外外面ナデ 口縁部に4条の凹 線文 口縁附近でやや外反	反転復原 勝土や歎 φ 0.5～1mmの砂粒を少量含む
19	4-9	弥生土器 甕？	4	最下層	—	3.4	底部 80%	外 10YR8/2 灰白 内 10YR7/2 に似い黄橙	底部内面ナデ 摩耗のため外面 調整不明	勝土やや密 焼成良 φ 1mm以下の 砂粒を僅かに含む
20	4-9	弥生土器 甕	4	最下層	—	(5.0)	底部 40%	外 10YR8/2 灰白～10YR7/2 に 似い黄橙 内 10YR8/2 灰白～ 10YR7/2 に似い黄橙	摩耗のため内外面調整不明	一部反転復原 勝土普通 焼成良 φ 0.5mm以下の砂粒を僅かに含む
21	4-6	弥生土器 高环	4	最下層	—	—	全体 10%	外 2.5Y7/3 浅黄 内 2.5Y7/3 深黄	摩耗のため内外面調整不明	一部反転復原 勝土やや粗 焼成良 φ 1mm以下の砂粒を少量含む
22	4-12	弥生土器 高环	4	最下層	—	—	不明	外 2.5Y8/3 浅黄～2.5Y7/3 深黄 内 7.5YR7/4 に似い橙	摩耗のため内外面調整不明	一部反転復原 勝土やや粗 焼成良 φ 0.5mm以下の砂粒を僅かに含む
23	4-10	弥生土器 高环	4	最下層	—	—	20%	外 2.5Y7/3 浅黄 内 2.5Y7/3 深黄	摩耗のため内外面調整不明 透孔 3箇所	一部反転復原 勝土普通 焼成良 φ 3mm以下の砂粒を僅かに含む
24	5-9	弥生土器 甕	5	5	(19.8)	—	口縁 20%	外 7.5YR7/6 橙 2.5YR6/8 橙 内 10YR7/4 に似い黄橙	外面部方向のハケ日 内面横方 向のハケ日 口縁部横ナデ	反転復原 勝土やや粗 焼成良 φ 3mm以下の砂粒少留
25	5-8	須恵器 壺蓋	5	501	(15.0)	—	30%	外 NT7/ 灰白 内 NT7/ 灰	内外面体部を回転ナデ 天井部 外面回板ヘラケズリ	反転復原 勝土緻密 焼成良好 φ 2mm以下の砂粒を少量含む
26	6-1	弥生土器 高环	6	603	—	—	30%以下	外 10YR8/2 灰白 内 2.5YB2 灰白	摩耗のため内外面調整不明	反転復原 勝土普通 焼成良 φ 1 mm以下の砂粒を少量含む

石器

番号	登録番号	器種	調査区	遺構 層位	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	石材	残存率	備考
27	1-19	楔形石器?	1	102	7.1	8.6	1.5	100.0	真岩	100%	各辺を削断状に剥離する
28	3-41	楔形石器?	3	包含層 第10層	5.4	6.7	1.4	51.2	真岩	100%	長方形に近く、3辺を剥離する
29	4-13	楔形石器?	4	包含層 最下層	6.0	5.1	1.3	37.8	真岩	100%	—
30	5-2	楔形石器?	3	包含層 第3層	6.0	6.6	1.5	72.4	真岩	100%	—
31	6-3	石斧?	4	604	8.2	6.2	2.5	114.0	真岩	25%	刃部を欠損した石斧か
32	6-7	敲石	6	604	15.2	11.5	8.3	1997.0	砂岩?	100%	6面に敲打痕
33	5-3	敲石	5	501	14.5	12.0	4.1	1027.0	砂岩?	100%	扁平な瘤円体をなす 両面に敲打痕あるが台石としても使用か
34	3-34	敲石	3	303	8.6	7.9	5.4	476.0	安山岩?	100%	2面に敲打痕
35	6-2	整修石斧	6	604	6.3	2.8	1.0	32.5	真岩	100%	両刃あるが片刃の研磨が著しい
36	5-1	石斧?	5	501	9.3	6.9	1.9	112.0	真岩	30%	刃部を欠損した石斧か
37	3-5	砾石	3	301	12.4	7.4	3.6	569.0	砂岩	100%	輪郭の非常に小さい砂岩で直角体の3面を砥面とする。

木製品

番号	登録番号	器種	調査区	遺構 層位	本取り	観察所見	長さ cm	幅 cm	高さ cm	厚さ cm
38	w6	杭	3	301	丸木	先端付近のみ	21.1	3.6 (最大径)	—	—
39	w7	杭	3	301	丸木	先端付近のみ	44.5	6.6 (最大径)	—	—
40	w1	板材?	3	301	板目	端部の一方が摩耗 欠損あり 組合せ容器等の板材か	24.3	3.5	—	0.7
41	w16	田下駄	3	301	駄目	長辺の一方を欠損 組合せた部材の痕跡あり	25.5	8.9	—	1.0
42	w15	田下駄	3	301	板目	破損し2片となっている 組合せた部材の痕跡あり	29.2	10.9	—	1.2
43	w60	建築部材?	4	最下層	丸木	1カ所に切り込みあり。表面を炭化させている	176.0	4.0 (最大径)	—	—

第V章　まとめ

調査において検出した遺構は水田を区画していたと見られる畦畔、自然流路、溝やそれに伴う杭列等であり、いずれも水田耕作に深く関わるとみられるものである。

3区、4区及び6区で検出した自然流路及び溝からは、弥生時代前期以降少なくとも古代に至るまで連綿と生活を営んできたことを示す遺物が出土している。遺構301は本遺跡の西側に位置する丘陵裾までの距離を考慮すればそれほど幅の広いものとはなり得ず、また前回調査時に検出した古代の流路の方向とも一致しないことから、単に自然流路の延長ではない可能性を指摘することができる。さらに整地土を伴うことから、計画的に整備された溝であると考えられ、遺構内から出土した木製品に田下駄とみられるものがあったことからも、例えば灌漑用水路等といった水田経営に深く関わるものであったことが推定される。検出したのは20m程度の長さではあるが、比較的標高の高い丘陵裾部に、現在の水路と同様に巡らされていた可能性も考慮する必要がある。

調査区6で検出した遺構604（自然流路）は平成22年度の調査において検出した流路の延長にあたると考えられ、東側上端に樹木根が並ぶ状況は非常によく似ている。埋土中の倒木や木片は前回の調査に比べ少ないものであったが、これは調査区6の北西付近まで滞留していた自然流路がここでやや南東に向けて流れの方向を変えるとともに、わずかな距離ではあるが直線的に流れることにより急に流速を取り戻すことになったため、遺物が残存しにくい状況にあったと理解することができる。また各調査区を包括的にみれば、自然流路の埋土最下層の更に下位となる地山の堆積は、西側ではいわゆる川原石のような円礫及び粗砂が堆積しており、東側は粒度の小さいシルトとなっていることが窺え、いずれの時期においてもこの自然流路は独立丘陵に沿ってそれを迂回する様に弧を描いて西流していたことが推定され、またその中では場所によって流速に緩急があったと考えられる。中世以降の流路は検出していないが、調査区1で確認したような、均一なシルトが厚く堆積する状況は一帯が湿地であったことを示すものといえ、同調査区の第2遺構検出面において検出した落ち込みもこれと同様の環境にあったと言える。

このような環境下における水田は稲刈り時に足が深く沈み込む、いわゆる深田であったことが推定され、今回出土した田下駄もそれに備えたものであろう。

引用・参考文献

- 1978 『すさみ町誌』 すさみ町誌編纂委員会
- 1983 『和歌山県史 考古資料』 和歌山県史編纂委員会
- 1985 『日本地名大辞典30 和歌山県』 角川書店
- 1994 『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 1996 『上土遺跡（立石地区）1（遺構編）』『上土遺跡（立石地区）2（遺物編）』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 1997 『弥生文化の研究』5 道具と技術 雄山閣
- 2013 『立野遺跡－近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書－』（公財）和歌山県文化財センター

ふりがな	たちのいせき							
書名	立野遺跡							
副書名	近畿自動車道松原那智勝浦線すさみ西インターチェンジ（仮称）事業に伴う発掘調査							
編著者名	寺西 朗平							
編集機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒 640-8404 和歌山市湊 571 番 1							
発行年月日	西暦 2014 年 3 月 19 日							
ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
たちのいせき 立野遺跡	わかやまけん 和歌山県 にしむろぐん 西牟婁郡 すさみちょう すさみ町 すさみ 周参見	市町村	遺跡 番号	° ′ ″	° ′ ″			
たちのいせき 立野遺跡	わかやまけん 和歌山県 にしむろぐん 西牟婁郡 すさみちょう すさみ町 すさみ 周参見	30406	2	33° 33' 19"	135° 30' 35"	20121126 ～ 20130211	1249	自動車道 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
立野遺跡	散布地	弥生時代	自然流路	突堤文土器・弥生土器・石器・木製品				
		弥生時代末	自然流路	弥生土器				
		古墳時代	自然流路	土師器・須恵器				
		平安時代末	溝	灰釉陶器・黒色土器				
要約	調査区 1 では水田跡とみられる遺構が畦畔を伴って検出された。調査区 3,4,6 では弥生時代前期、中期、後期から古墳時代、古代の各時代における自然流路及び溝が重複して検出された。古代の溝は護岸とみられる整地土を伴い、多量の木質遺骸を含む埋土中から田下駄と考えられる木製品等が出土した。							

立 野 遺 跡

—近畿自動車道松原那智勝浦線

すさみ西インターチェンジ（仮称）事業に伴う発掘調査報告書—

発行年月日：2014 年 3 月

編集・発行：公益財団法人 和歌山県文化財センター

和歌山市湊 571 番 1

印刷・製本：株式会社ウイング



1.

調査地周辺（南から）



2.

調査区 1

第4層下面検出遺構(東から)



3.

調査区 3,4,5,6 全景（東から）



1.

調査区 1 セクション 1 土層
(南から)



2.

調査区 3 杭列検出状況
(北から)



3.

調査区 3 遺構 301 検出状況
(南から)

1.

調査区 3 遺物出土状況
(No. 41 木製品 東から)



2.

調査区 3 遺物出土状況
(No. 42 木製品 南から)



3.

調査区 5 遺構 501
検出状況 (南から)



1.

調査区 6 遺構 604
自然木出土状況及び土層
(南から)

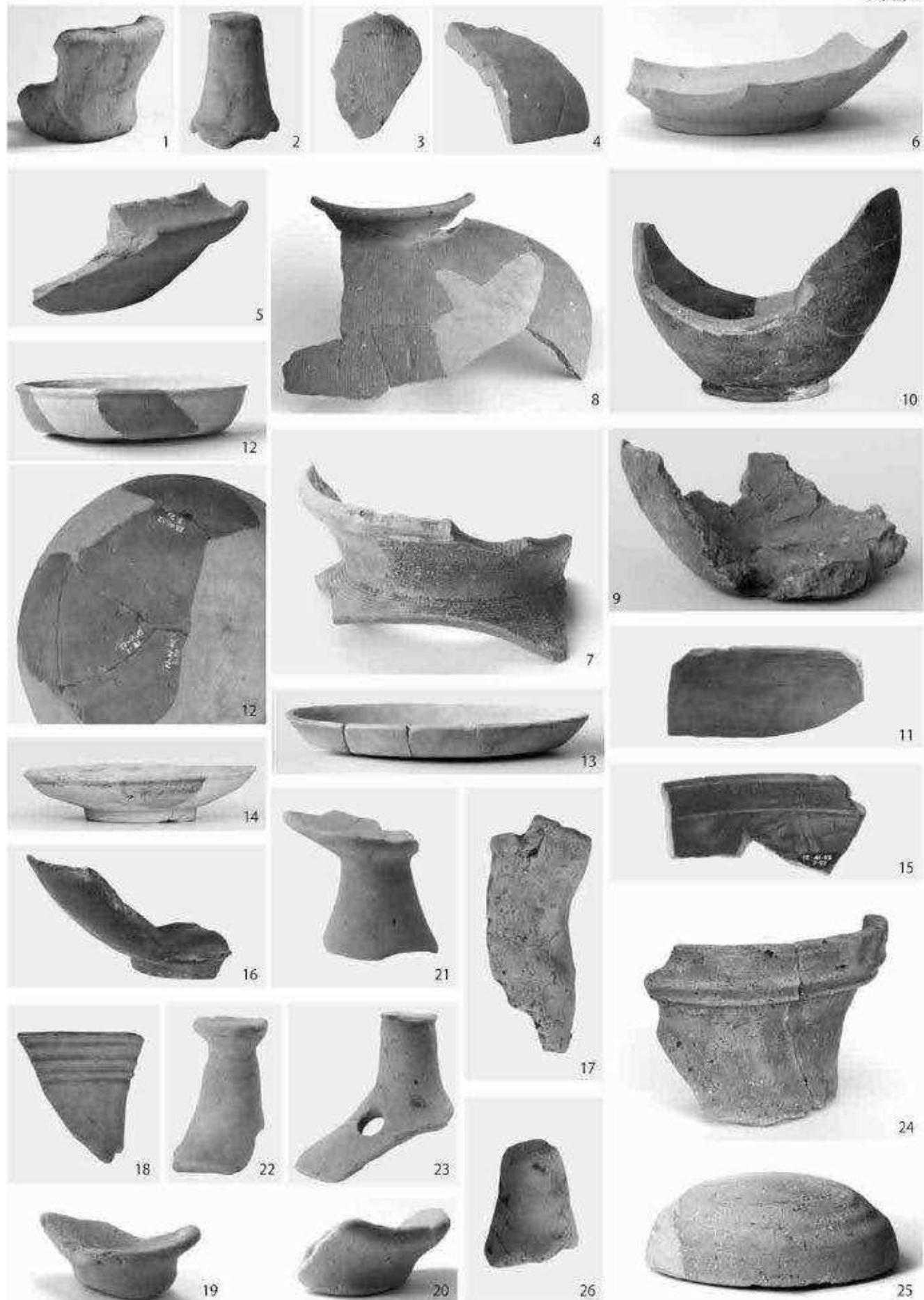


2.

調査区 6 遺構 604
(北から)

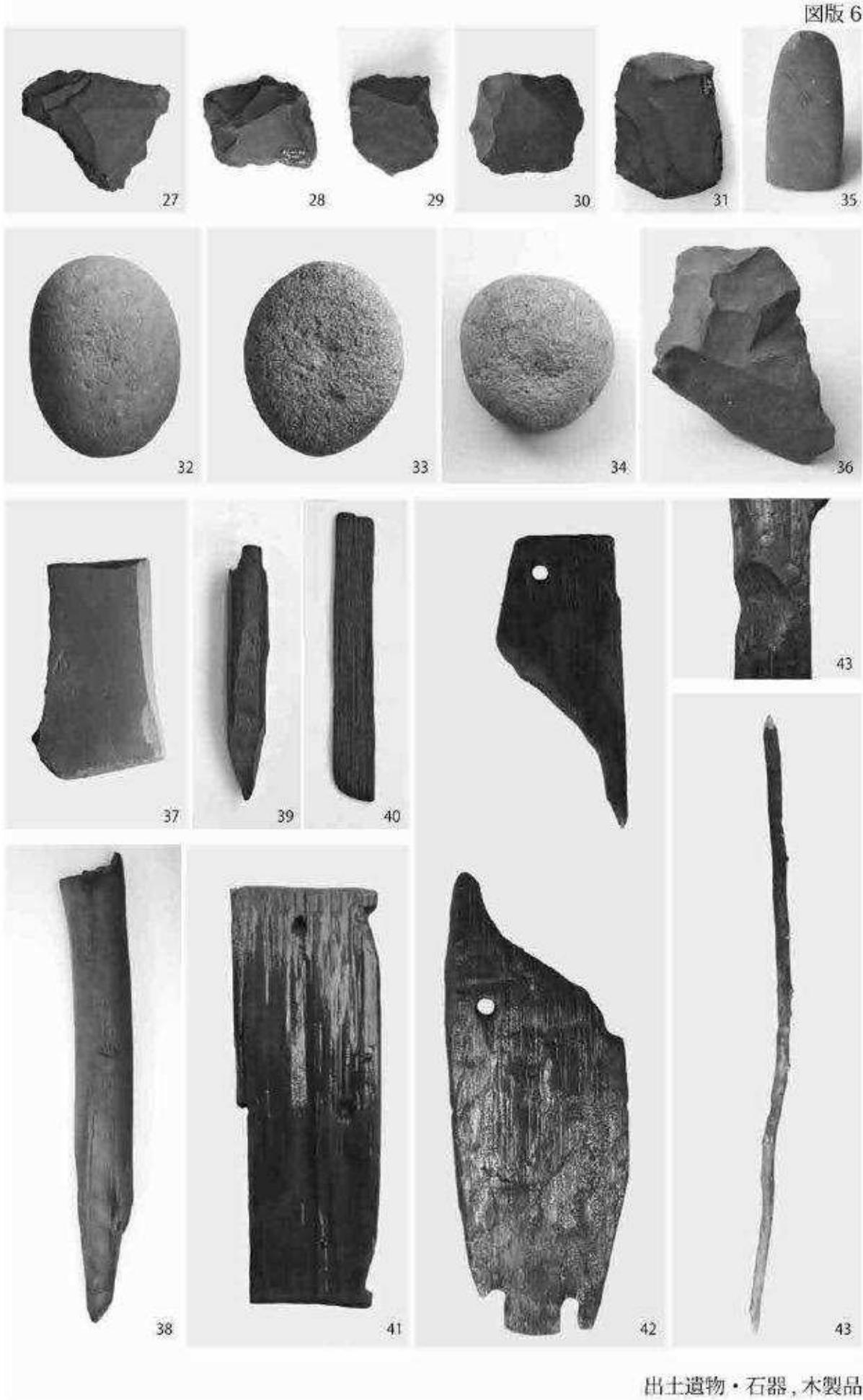


図版 5



出土遺物・土器

図版6



出土遺物・石器、木製品

